

ワークショップの議論概要 A 東栄町グループ

2006年4月16日

司会:木野

コメント:黍嶋

記録:三島

●コンセプト

大切なのは、農村と都市の交流するためのソフトをトータルにコーディネートする力であり、その力を、農村側・都会側の両方が、対等に育んでいくことが必要である。

●農山村と都市をコーディネートしていくために必要な要素とは何か?

1 地域が持つ資源を活かすこと

○ 農山村で生活を体験する上で活かせる資源としては、「空家」「廃校」が代表的。

- 空家については他人が使うことに抵抗感があり、こうした人たちの協力をとりつけたり、試験的に活用するという段階を踏むことが必要とされる。
- 廃校活用についてはプログラム開発が不可欠で、「中高年の健康教室」「伝統なお祭りの練習」「環境教育」などがキーワード。

①空家を使い、都会の人の田舎暮らしを推進する

- そのために… *空家を持っている人の協力をとりつけること
*暮らしを試験的に体験するプログラムの開発

②廃校を活用する

- そのために… *短期滞在型の施設としての活用
*学生のスポーツ合宿以外のシーズンの活用
*健康学園(中高年を対象に3ヶ月間実施)
*花まつりをオープンにする、週末に廃校で練習会を行う
*まつりは、来た人が見るだけではなく、参加して楽しめるものに
*民宿への宿泊体験を含んだ質の高い環境教育の開発が大切

③畑や野山の自然

- そのために… *小さな採集ツアー

④「食」と「花」の魅力を活用

2 農山村の魅力を確立すること

○農山村が生活しやすいコミュニティとして条件整備する上で不可欠なのは、「生産機能」「医療」「教育」が大切である。また、「景色」「おいしいもの」「静けさ」をバラバラのものでなく、トータルな魅力を持つ空間として自分をおける場にする…という価値をつくりあげる。

①トータルな魅力を確立する

- そのために… *「景観欲」トータルした風景の場を自分をおくという魅力
*視覚、聴覚、味覚などをトータルにコーディネートする

- ②「生産」の機能を確立する
- ③教育環境を保持する
- ④医療サービスが備わって、安心して住める

3 生きがい・ライフスタイルづくりの価値をもたせる

○一回きりの訪問者ではなく、リピーターとしてその農山村を訪ね、そこで「生活してみよう」という魅力を持つには、生きがいを持ってそこで暮らせる仕組み・状況をつくるのが大切で仕事の開発が欠かせない。さらにそうした暮らしを都会人に提案できるような<ストーリー><シナリオ>に変換していくことが必要である。

- ①リピーターが生じるようなシナリオ
- ②田舎の強みを活かすストーリーづくり
- ③イモ盗人あそびを復活して、都会から人をよんで「自然児再生」を推進する
- ④農山村で仕事をしながら暮らせるという仕組みをつくる(例;コミュニティバスの運転手)そして、その情報を発信する
- ⑤直売所に売るのが運ばれ、売る人がいるという状況をつくる

4 情報の力を活かす

- 農山村側から、地域のPRを色々としているにもかかわらず、まだ都会側にいきわたっているといえない。単なる観光情報ではなく、そこに繰り返し訪れる、暮らす人々を想定した情報発信が必要。
- こうした情報力の強化の重要な要素として、①コンテンツとしては「人材・求人」「食への問いかけ」などがあり、②情報のマネジメントとして、「情報のリニューアル」「アイデアを募り、情報がつながるような双方向性」「丁寧なお世話」などがある。さらに、③メディア・仕組みとしては、「映像が使える情報局づくり」「農村側からの情報提供のコストをシェアできる集合型の拠点づくり」「資料・展示・商品だけでなく、人がいてストーリー・提案といった付加価値をつけていくこと」が挙げられた。
- 今後問われるのは「情報の見せ方」であり、この部分に知恵が結集できるよう、中間支援団体が資源をつないでいくことが求められる。

- ①政府支援に頼らない人材情報
- ②リピーターが生じるようなシナリオ、情報提供の仕組み、情報のリニューアル力の向上
- ③都会生活者向けの教育、食のあり方の問いかけ
- ④施設の利用促進・再利用を図るためのアイデアを募る、情報をつなぐ場をつくる
- ⑤空家情報の丁寧な情報コーディネート・お世話
- ⑥グッドタイミングで流す、どんな情報があるとよいのかを知る
- ⑦情報提供のコストをシェア・削減するために共通の拠点を つくる

- ⑧農山村いきいき情報放送局
- ⑨情報の見せ方のコーディネート。中間支援組織

5 キーパーソンの力をつける

○実際に推進していくのに必要なキーパーソンだが、地域でいかに「発見するか」「育てるか」「つなぐか」が課題である。特に、都市・農山村側では、Uターン者にその期待が集まっている。
また、「著名人を巻き込む、その仕組みに「〇」も関わってもらう」「農学生との連携」・・・といった今までにない人の力を結集させるという提案もあった。

- ①地域のキーパーソンを発見する、つなぐ
- ②地元のリーダーを育てる
- ③都市・農山村の両方のニーズを把握しているUターンの人々の力を活用する。
- ④遊べる資源をコーディネートできる人
- ⑤都会の人を受け入れる体制づくりのための研修
- ⑥地域おこしの秘訣が、地域の人々が学ぶことができる場をつくる。
- ⑦人をひっぱって来られるような著名人を巻き込み、その仕組みを「〇」も活用してつくる。
- ⑧大学農学生との連携

以上
記録担当：三島

ワークショップの議論概要 B 大豆畑トラストグループ

2006年4月16日

司会:大沼 司会補佐:星野 記録:竹内

●コンセプト

農村と都市の交流を深めるために、両者が今後もつながっていける継続的なつながりを創出する事が重要である。

「つながっていくつながりづくり」

●農山村と都市のネットワークをコーディネートしていくために必要な要素とは何か?

1. 農山村と都市の現在おかれている状況

- ① 農山村の方が割り勘負けしているのではないか?
 - 都市は割り勘勝ちをしている
 - 若者/働き手を都市が農村から奪った
 - グローバリゼーションという動きの中で不振が続く農林業
 - ② 観点を変えると都市の方が割り勘負けしている
 - 都市での税金は都市ではあまり使われていない
 - 農村だけが被害者ではない
- どのように対等な状態にしていくのか?

2. 都市側から農村に求めるもの

- ① 都市に農村から提供される情報
 - 情報発信だけでなく…
 - 情報と実感
 - 情報がうまく伝わる場所が欲しい
 - おいしい大豆はどこでつくっている?どこで手に入る?
 - 情報はやる気になればどこでも手に入れられる
- ② 都市住居者が求めるニーズ
 - 癒し感
 - 取り繕わない本物のおもてなしの心
 - 都市側のニーズに農山村側が応えられるか? = 利害のマッチング
- ③ 子どもが行きたがる企画
 - メニューの幅広さ
 - 入口は入りやすく、奥行きが深いメニュー設定
 - 学習する機会を提供 → 教育
 - 自分が体験した事を子供たちに伝えていく機会を

- 知恵の遺産相続
 - 知らないといけないこと、伝えないといけないことを次世代に伝えていく
- ④ 都会の人が求めるふるさと
- 田舎暮らしの良さを感じてもらえるようなサービス
 - 故郷として入っていける場所があればいい
 - 農村が故郷となり、自分たちの土地への愛着がわき、守っていきたいという気持ちになる

3. 社会問題

- ① 高齢化しているのは前から同じ人
- 新しい人が入ってこない
 - 村から出た人で、育った村をどうにかしたいという人がいない
- ② 生涯現役といいながら…
- 高齢化し、出来なくなった部分だけでも手助けしてほしい
 - 何か手立てしないと…特にえらい部分の援農
- ③ 帰農する団塊世代
- 具体的な新しい生活スタイルとして帰農する
 - 帰農した時に生活基盤が出来ているのか
 - 農村における生活保障や医療問題
 - きれいごとだけではすまされない近所付き合い
- ④ 都市化する農村
- 市民農園で小規模農業をしたい人はいるが…
 - 都市化された地域の田畑をどう守っていくか
 - 人手が足りず、不耕地が増えていく

4. 具体的な解決方法

- ① 地道な取り組み
- あまり関心が無いマジョリティーをどう振り向かしていくのか？
→ 食べ物 = 日常的なもの
※ 食べ物を中心とした地道な活動を中核にすればいいのでは？
- ② ビジネスモデル
- ラシックにあるモクモクファーム
 - 田舎で作ったものがそのまま栄で食べる事が可能
 - 野菜の直売場(無人販売所)
 - 地域で作った野菜を売り、それが現金収入になっている
 - ヨーロッパなどでの取り組み
 - 都市と農村での収入差を小さく取り組みがされている
 - グリーンツーリズム
 - 農村と都市の交流として

- 農作物をつくる人と食べる人のニーズをマッチングさせる
- 地域の人たちが自分で何かをつくる方法を生み出していく
- モノに付加価値をつけることによって都会でも売れる商品を開発する = 金になる方法を知る
- 継続できるビジネスとして成立させる

5. 継続するために必要なこと

- ① 人材の確保
 - ボランティアの流れを作りたい
 - 都会の人に有償でも手伝ってもらおう
 - 有償化し、作業を手伝ってもらおう
 - 世代交代が出来る仕組みをつくりだす
 - 分かりやすい収入や見返りが得られる体制をつくる
- ② 信頼関係の構築
 - ボランティアでも無責任なことでは続けていけない
 - やったことが分かりやすく返ってくる仕組みづくり ex.お金
 - いい作物が取れるなど、一定のビジネスとして成立させる
- ③ 信頼のあるネットワーク構築
 - 新たに土着した人をネットワークの中核に
 - 農村で都市の人と交流する体制作り
 - 行政主体ではなく、住民主体によるネットワーク構築

6. 新しい価値観の創出

- ① 新しい価値観を創出
 - お金以外の価値を
 - 新しい情報が入ることにより、新しい生活価値観が生まれている
- ② 新しいコミュニティの創出

以上
記録担当:竹内

ワークショップの議論概要 **C すぎもと農園グループ**

2006年4月16日

司会:中川 司会補助:伊藤 記録:岩尾

●コンセプト

必要とされるのは、農山村と都市の双方から「信頼」され「行動」するMPセンターである。都市でMPセンターを担うNPOとの協働事業を通じて、農協のような地元からの信頼ある既存組織が活性化・意識変革し、農山村におけるセンターの支店(営業所)機能として、ネットワークの一翼を担う。

●農山村と都市のそれぞれのニーズは何か?

1 退職後に挑戦する第2の“職場”

- 農山村では定住人口がますます減少している。定住するには現金収入を得られる職場が不可欠なため、第一次産業の衰退とともに、職場を求めて若者は都市へ出て行ってしまった。高齢化が進み後継者もない現状を前に、第一次産業の担い手育成が急務である。
- 都市の団塊世代は退職後に何を求めるのだろうか。生産活動を離れ老後を楽しく過ごそうと考えている人がいる一方で、退職後も働きたいというニーズは少なからずあると予想される。
 - 農山村で第一次産業に挑戦する人への支援の不足…
 - ① ハード、ソフト、生活環境への支援機関がない
 - ② 働き口として一次産業をコーディネートできる機能が必要
 - ③ 都会人には馴染みにくい田舎のルール、慣習の壁
 - ④ 集会や話し合いの場が頻繁にあり、それに参加しないと受け入れてもらえない

2 空家や農地の取得情報・方法

- 空家があっても、貸すと近所に何か言われるのではないかと「懸念」や、どんな人が入るのか判らないという「不安」があり、簡単に貸さない。また、制度的にも都市の人が農村に行っても、農家でないと、簡単に農地を取得できない。
- 田舎暮らしをしたいと思って役場の産業課などへ連絡しても思った回答が得られない。イベントで「農業をやりたいのだけど」「こちらで農地はないでしょうか」と聞く人がよくいる。
 - 情報・相談センターの不足…
 - ① 農山村の情報を集約している情報・相談センターが都市にない
 - ② 空家情報を集める
 - ③ 農山村側にも情報を集める支店がある
 - ④ 個人のニーズは多様なので、それに十分対応できるような情報、コーディネーターが必要
 - ⑤ 週末に時間をかけて農業体験をして、できるなら土地を買うという2段階
 - ⑥ ただ情報が置かれているだけのセンターではだめ

3 農業新規参入者への技術指導

- 都市の人が農村に移り住んでも、すぐに農業ができるようになるものではない。誰が農業技術を教えるかが課題となる。農家も忙しい。都市の人が信頼して技術習得まで指導を任せられる支援者が必要である。
 - 農協、魚協、森林組合などの活用…
 - ① 技術はあり、教えられる人材もいる
 - ② 農協の中にも考えている人がいる
 - ③ 農事組合法人を設立して農業指導や農地取得を支援する方法もある

●「信頼」と「行動」のMPセンターを構築するために必要な要素とは何か？

1 「信頼」ある組織との連携

- 農山村の人は疲れきっている。これまで都市の人にいろいろなサービスをただけで何も残らなかった。また、ビジネスや金儲けを考えて、悪いことをするために農山村に入り込んでくる企業もあるので注意が必要である。
- 農協、魚協、森林組合など、長年の活動によって地元の信頼を得ている既存組織がある。これらの組織と連携することで、安心できるコーディネーターが確保できる。ところが、何のために農協があるのか、生産者にとって本当に役に立っているかは疑問がある。改革が必要とされている。
 - 農協の現状と問題点…
 - ① 金融、共済、生産販売所など何でもやっていて、マンモスになりすぎている
 - ② 市町村合併の影響で農協も合理化され、小さな集落からは撤退している。
 - ③ 今やっている人たちの農業振興には熱心に取り組んでいるが、新たな参入者へのサポート機能はない。
 - ④ 組合員の高齢化、後継者不足は深刻な問題として感じてはいるが、解決策として新規参入者の拡大や支援には発想が至らない。
 - ⑤ 農地斡旋もやれるが、あまり力を入れてない。
 - 求められるMPセンター像…
 - ① 既存組織の農協や魚協を活かして、その機能をつなぎ合わせる
 - ② 農協などの既存組織を動かす力を持つようにしないと難しい
 - ③ 農山村側にも支店機能や営業所機能を持って、同じ思いを共有する人が必要

2 「行動」によって意識改革をするのが目的

- 農山村も都市も双方が意識を変えることが様々なプロジェクトに取り組む目的である。農山村は、どのようにしたら都市の人に理解してもらえるかを考え、都市は、農山村に行けば楽な暮らしができるという意識を変える。お互いの意識を変えて、理解しあう。
 - 都市の意識…
 - ① 田舎暮らしは素敵だ
 - ② 田舎に行けば、ほとんどただで暮らせる
 - 農山村の意識…
 - ① 何も声を出さないのが調和だ

- ② 中から新しい取り組みをする人の足を引っ張る。
 - ③ 外から入ってくる人へ手を差し伸べることはしない。
- 走りながら考える、今できることから動き出す、都市の人もとりあえず農山村に入ってみるという意識で取り組むことが大切である。また、結果としてマッチングが成功するのは、10 人来て1人、100 人来て1人かもしれないが、地道にやっていくことが重要である。まず行動、そして、コツコツ、カツコツ(勝つコツ)。
- 事例1) 愛知県設楽町田峰…
 - ① 17戸を新築し、都会から田舎への移住者を公募した
 - ② 子どもがいる若い夫婦世帯が入居し、人口が増えた
 - ③ 小学校の児童が9名から18名になった
 - ④ 建設費1億円は農協などいろいろなところから借りた。公的援助一切なし
 - ⑤ 地元に仕掛け人が何人かいる
 - ⑥ 子どもたちを育てるのが目的
 - 事例2) 新潟県黒川村…
 - ① 町長は観光と農業を結びつけた
 - ② 湯布院に似ている
 - ③ ホテルで地元の農産物を使ってフランス料理を提供することで、従来の郷土料理にない、新しい発想がもたらされた
 - ④ 都会の人と交流することで住民の意識を変えた
 - ⑤ 何を意識しながら取り組むかが大切
 - ⑥ 町長は、都会の人に来てもらうことによって地域住民の意識を変えることを48年間やった
 - 事例3) 愛知県豊田市…
 - ① 団塊世代ターゲットに市役所と農協が協働実施

以上
記録担当:岩尾